



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL(082)241-5246(代表) FAX(082)542-7941 E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成24年(2012年)5月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

国連欧州本部に被爆に関する常設展示を開設



開会式でテープカットをする広島・長崎両市長（手前から）

二〇一二年十一月十一日、スイス・ジュネーブ市にある国連欧州本部に「核兵器のない世界をめざして」と題する常設展示が開設されました。この展示は国連本部（米国・ニューヨーク市）に設置されている常設展示に続き、広島市と長崎市が日本政府や国連などの協力を得ながら共同で取り組み、実現したものです。熱線^{あつせん}を浴びた丸瓦^{まるがわ}、浦上天主堂^{うらみょうじやうどう}の天使像などの広島・長崎の被爆資料十三点が、被爆の実相と国連を中心とした軍縮の取組について説明した写真パネル十二枚などとあわせて展示されています。

常設展示会場で行われた開会式には、国連、日本国政府、広島・長崎両市関係者など百人余りが出席しました。

松井・広島市長は、挨拶の中で、この常設展示が核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けたヒロシマ・ナガサキの取組の更なる展開の拠点となることも、この展示を見た多くの人が実際に広島を訪れ、被爆者の思いに触れてほしい旨を述べました。

開会式に参加した国連関係者や一般来場者は、熱心にパネルや被爆資料を見学していました。

（平和記念資料館 啓発課）

目次

国連欧州本部に被爆に関する常設展示を開設	1	平成24年 追悼平和祈念館企画展「しまってはいけない記憶 一家族への思い」	10
第8回平和市長会議理事会の開催/スペイン国連協会から「第32回平和賞」を受賞	2	被爆体験記6編を16言語に翻訳、公開しています/	
第1回平和市長会議国内加盟都市会議を開催	3	追悼平和祈念館の入館者が200万人に到達しました	11
「未来がやってきた」(スティーブ・リーパー)	4	平成23年度「国際交流・協力の日」	12
「広島を平和思想を伝える」第5回講演会/国際基督教大学の「広島・長崎講座」現地学習	5	「姉妹・友好都市の日」記念イベント/「日本語教室ボランティアスタッフのためのスキルアップ講座」の開催	13
被爆体験記「悲劇の中学1年生」(新井 俊一郎)	6	留学生会館まつり2011	14
オーストラリアで初のヒロシマ・ナガサキ原爆展を開催/		「被爆体験の継承と人権教育の推進」(小早川 健)	15
「被爆体験証言者交流の集い」研修会を開催	7	「戦争も核兵器もない平和な世界をめざして—市民の力で核兵器廃絶を!—」(広島県生活協同組合連合会)	16
第29回ヒロシマ平和書道展/第26回子どもたちの平和の絵コンクール	8		
平和記念資料館 平成23年度第2回企画展「広島、1945—写真が伝える原爆被害—」	9		

第八回平和市長会議 理事会の開催

平和市長会議は四年ごとの総会の中間年に理事会を開催しています。昨年十一月九日(水)と十日(木)、スペイン・グラノラズ市で第八回理事会を開催し、今後の取組や平成二十五年(二〇二三年)の総会の広島開催等について審議・決定するともに、今後の運営方法などについて広く意見交換を行いました。あわせて二〇二〇ビジョンキャンペーン協会運営委員会・役員会を開催し、今後の二〇二〇ビジョンキャンペーンの展開について協議しました。

【参加都市】

広島市(日本)、長崎市(日本)、グラノラズ市(スペイン)、ビオグラード・ナ・モル市(クロアチア)、ハラブジャ市(イラク)、ハノーバー市(ドイツ)、マラコフ市(フランス)、マンチェスター市(英国)、ポルゴグラード市(ロシア)、イーペル市(ベルギー)、フォンゴ・トンゴ市(カメルーン)

【主な審議・決定事項】

①加盟都市を挙げた「核兵器禁止条約」の交渉開始を求める市民署名活動の展開。
②「核兵器のない世界」の実現を促



第8回平和市長会議理事会に参加した各都市代表

【意見交換事項】

①理事会開催地を広島市と長崎市に固定すること、②平和市長会議運営経費の負担のあり方、③平和市長会議地域組織の設立と地域ごとの活動の役割分担。

今後、実務担当者による検討委員会を設置し、ハノーバー市で初会合を開催することとしました。

広島市長がバルセロナ市、ジュネーブ市等を訪問し、平和市長会議の取組への協力を要請

十一月十日

理事会終了後、松井一實^{かずみ}・広島市長は、スペイン・バルセロナ市にある都市・自治体連合(UCLG)本部を訪問し、ジョセップ・ロイ事務局長と面会し、平和市長会議との協力関係を強化するよう要請しました。

続いて、カタロニア州自治政府を訪問し、アルトゥール・マス首相と面会し、平和市長会議の取組への理解と協力を求めることにも、広島・長崎を訪問し、被爆の実相に触れるよう求めました。

十一月十一日

スイス・ジュネーブ市にある赤十字国際委員会本部を訪ね、ヤコブ・ケレンバーガー総裁と面会しました。松井市長は面会の中で、二〇一〇年四月、ヤコブ・ケレンバーガー総裁が「核兵器の使用が国際人道法に適合する状況を想像するのは難しい」と発言



ヤコブ・ケレンバーガー赤十字国際委員会総裁との面会

していることを踏まえ、平和市長会議と赤十字の目指す方向は同じであり、今後、連携を深めていきたいと述べました。

(平和連帯推進課)

スペイン国連協会から 「第三十二回 平和賞」を受賞

世界百五十三カ国・五千を超える自治体で構成する平和市長会議の、大量破壊兵器の廃絶、特に核兵器の廃絶に関する分野での平和推進活動が評価され、スペイン国連協会から平和市長会議に「第三十二回平和賞」が授与されました。

平和市長会議理事会出席のため現地を訪れていた松井市長は昨年十一

月九日(水)に、スペインのバルセロナ県庁で行われた授賞式に出席し、「喜びに堪えない。被爆者の平均年齢は七十七歳を超えており、核兵器廃絶という被爆者の悲願の実現に向け一層努力したい。」と述べました。なお、授賞式には、理事会出席者など約百人が参加しました。

スペイン国連協会とは？

一九六二年にスペインのバルセロナに設立された国連経済社会理事会(ECOSOC)登録NGO。一九七九年に「平和賞」を創設し、国連の発足日(十月二十四日)にあわせて、国連憲章に掲げられた目的である平和構築と人権擁護の分野等で功績のあった個人又は団体に授与しています。

(平和連帯推進課)



「第32回平和賞」授賞式(2011年11月9日)

第二回平和市長会議 国内加盟都市会議を開催

平和市長会議の国内における取組の充実を図るため、本年一月十三日と十四日の二日間、平和市長会議、広島市及び長崎市の主催により、初めての平和市長会議国内加盟都市会議を広島で開催しました。



第1回平和市長会議国内加盟都市会議

初めての国内加盟都市会議

平和市長会議は、昭和五十七年（一九八二年）の設立以来、海外の都市に絞って加盟を呼び掛けてきました。唯一の被爆国である我が国の自治体が率先して取り組み、国際世論の醸成をリードすることが

必要であるとの認識の下、平成二十年（二〇〇八年）二月から国内の都市にも加盟を呼び掛けています。

その結果、本年四月一日現在、世界の百五十三か国・地域から五千二百二十一の都市に加盟していただいております。そのうち日本国内の加盟都市数は、全市区町村の六五・四％に当たる千百三十九都市となっています。この数は、加盟都市全体の二割を超えており、今後、日本の加盟都市に期待される役割がますます大きくなると考えられます。

こうした状況を踏まえ、この度、初めての平和市長会議国内加盟都市会議を広島で開催しました。会議には、全国の八十八自治体から百三十一人（うち首長四十一人）の出席がありました。

一月十三日（金） 開会、被爆体験証言

平和市長会議会長である松井一實^{かずみ}広島市長の開会挨拶の後、梶本^{はしかもと}淑子^{しづこ}さんによる被爆体験証言が行われました。証言に心を打たれ、出席者全員が核兵器廃絶への思いを新たにしました。

原爆死没者慰霊碑参拝・献花、平和 記念資料館見学

続いて、原爆死没者慰霊碑に参拝し、ピース・ボランティアの皆さんから慰霊碑の碑文について説明を

受けた後、献花を行いました。その後、平和記念資料館を見学しました。



原爆死没者慰霊碑献花

第八回平和市長会議理事会開催結果報告、映画「ひろしま」の鑑賞

松井広島市長が、昨年十一月にスペイン・グラナダ市で開催した第八回平和市長会議理事会の開催結果報告を行うとともに、原爆投下後の凄惨な状況等を描いた映画「ひろしま」の一部を鑑賞しました。

会議Ⅰ（各都市の取組事例報告）

①長野県松本市の取組事例報告
松本市の平和行政への取組や昨年七月に開催された「第二十三回国連軍縮会議 in 松本」の概要について、菅谷^{すがや}昭松本市長が報告を行いました。

②神奈川県逗子市の取組事例報告

昨年八月に開催された「第一回す

し平和デー」の取組や広島、長崎等へのピースメッセンジャー派遣事業などについて、平井^{ひらい}竜一^{りゅういち}逗子市長が報告を行いました。

一月十四日（土）

会議Ⅱ（国内における今後の取組等について）

二日目は、「核兵器禁止条約」の交渉開始を求める市民署名活動を加盟都市を挙げて展開すること、「核兵器禁止条約」の早期実現に向けた取組の推進について日本政府に要請すること、加盟都市において原爆被害の実態等に関するポスター展の開催等に取り組むことについて審議し、それぞれ原案どおり承認されました。

また、平和市長会議運営経費の負担のあり方、平和市長会議の日本地域組織の設立等について意見交換が行われました。

そのほか、二〇二五年NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議第一回準備委員会（オーストリア・ウィーン市）への平和市長会議代表団の派遣、第八回平和市長会議総会の平成二十五年（二〇二三年）八月広島開催などについて事務局から説明するとともに、日本国内における平和市長会議の名称を平和首長会議に変更することや、東日本大震災での経験を踏まえた災害時の対策のあり方などについて意見交換

が行われました。

会議Ⅲ（会議総括文書の採択について）、閉会

会議Ⅱで承認された内容などを盛り込んだ「第二回平和市長会議国内加盟都市会議総括文書」を採択し、平和市長会議副会長である田上^{うえの}富久^{とみひさ}長崎市長の挨拶をもって会議を閉会しました。

日本政府への要請活動

会議で決定した日本政府への要請について、本年一月二十六日に、松井^{まつい}広島市長と神近^{かみちか}宣博^{のぶひろ}長崎市長、京事務所長が中野^{なかの}譲^{じょう}外務大臣政務官に面会し、「核兵器禁止条約」の早期実現に向け具体的交渉開始のリーダーシップをとるよう求める野田^{のた}佳彦^{よしひこ}内閣総理大臣宛ての要請書を出しました。

（平和連帯推進課）



左から中野外務大臣政務官、松井市長、橋本博明衆議院議員、神近長崎市長事務所長

未来がやってきた

本財団理事長
ステイブ・リーパー



アラブの春
やオキュパイ
(占拠) 運動な
ど、世界中で
様々な動きが
目まぐるしく

通して彼らを潰してしまっか、です。

最近、何人かの人達にこう尋ねられました。「平和市長会議は今どうなっていますか?」最近あまり話題に上りませんね。最近話題に上らなかつたのは、最初の段階は水面下の作業にならざるを得ないからです。平和市長会議は今、重大で根本的な変化を遂げようとしています。加盟都市数五千という目標を達成したので、より大きな組織作りから、より強固な組織作りへと、重要な「転換」の準備を進めているところです。加盟都市を増やす努力は続きますが、今後は、迅速に同時に多言語で世界的に展開するキャンペーンを遂行できる、財政基盤のしっかりした強力な組織を作ること、これまで以上のエネルギーを費やすことになりました。

昨年十一月にスペインのグラノラーズで開かれた第八回平和市長会議理事會が素晴らしい転機となりました。この「転換」が承認され、公式に始動したのです。理事會は初めてアフリカと南米からの参加者を迎え、「第三世界」のエネルギーが全ての議論に大きな影響を及ぼしました。その画期的な會議で私達は、世界規模の原爆展キャンペーンによって加盟都市五千の節目を祝うことに決めました。現在、五月にウィーンで世界公開する新しい原爆展ポスター一式を準備中です。これらポスターを今

年の平和週間(八月三日〜十日)に出来るだけ多くの加盟都市で展示する計画です。もちろん、展示されるなら平和週間だけでなく構いません。九月二十一日の国際平和デー、十月二十四日の国連デー、十月二十四日〜三十一日の軍縮週間の展示は特に大歓迎です。この計画は、単に出来るだけ多くの原爆展を開催する試みではありません。平和市長會議に世界規模のキャンペーンを盛り上げ、

まとめて行く能力があるかどうかを判断する試金石となり、またその力を付けるための試練でもあるのです。しかし何はさておき、平和市長會議の運営のため、そしてキャンペーンのため、理事會では次のことが必要であるという合意がなされました。

①加盟国の地域組織を設立し、②これらの地域組織ごとの運営のため、指導的立場の都市を任命し、権限を与えて、その役割と責任範囲を明確にし、③もっと多くの都市がキャンペーン資金の調達に関わることできる方法を模索すること。この合意が、慎重な検討を要する抜本的な運営上の変化につながることは容易に推察できます。そこでさらに私達は、ドイツのハノーバーで実務担当者による検討委員會を開き、運営基盤やキャンペーン体制の見直しを行うという画期的な合意にも到りました。

一月、九都市の実務担当者、我々がハノーバープロセスと呼ぶ最初の

会合に出席しました。三日間かけてアイデアを出し合い、選り抜き、考え得る文化的・組織的問題について検討を重ねました。そして最後には参加者全員が、「転換」はまだ始まったばかりだが、出だしは上々だと感じていました。現在のところ、幾つかの具体案がハノーバープロセスに参加した九つの都市の間で審議されています。ハノーバープロセスは、運営に関する一連の提言を練り上げ、二〇一三年に広島で開催される平和市長會議總会で正式に履行承認を得ることを最終目標としています。その總會でもまた、平和市長會議に少なからぬ変化が起こることになると

思います。世界中の加盟都市の市長に加え、政府関係者やリーダー各々のNGOの代表も會議に招へいしようというのです。つまり、二〇一三年の總會を実質的な世界軍縮會議とし、一丸となって世界規模のキャンペーンを展開するための共通の戦略・戦術を確立しようというのです。そのキャンペーンは、二〇一五年に広島で政府首脳の参加を得て開催されるサミットで頂点を極め、核兵器禁止条約へのプロセスに着手し、二〇二〇年までに核兵器廃絶を実現します。

この計画を成功させるために、皆さんの手助けを必要としています。

①お住まいの地域の首長の方に、二〇一三年に広島で開かれる平和市長會議總會に参加するよう頼んで下さい。平和市長會議に加盟していただくも参加できます。

②お住まいの地域の役所に、二〇一二年に原爆展を開催するよう頼んで下さい。展示資料及び詳細については平和市長會議: mayorcon@pef.city.hiroshima.jp までお問い合わせください。

③平和市長會議のウェブサイトを(mayorforpeace.org) にアクセスして署名活動に参加し、署名用紙をあなたの家族、友人、知人、そしてケ力相手の皆さんに転送して下さい。

④世界を救う活動に参加して下さい。平和市長會議のみならず、今あなたが住んでいる地域にも何百という素晴らしいグループが目覚ましい活動をしているはずですよ。そんな活動を検索してみて、気に入ったものを選び、参加して下さい。

「大人達」は、本気で私たちを潰したいわけではありません。ただ彼らは、支配欲に駆られ、戦争文化に染まった過去の遺物で、見識ある平和文化の指導をどうしようもなく必要としている人々たちなのです。彼らの時代遅れの戦争文化の習性が私たちを崖っぷちから追い落とし、前にも、何とか彼らにこのメッセージを届ける方法を見つけ出して下さい。お願いします。

(本記事は短縮版です。全文はウェブ版でご覧になれます。)

シリーズ講座 広島市の平和 思想を伝える

被爆六十五周年となった平成二十二年度から、平和を希求し核兵器の廃絶を願うヒロシマの思想を生み出してきた先人の考えや行動を知り、後世に伝えていくため、シリーズ講座「広島市の平和思想を伝える」を開催してきました。

第五回講演会

最終回となる第五回目は、昨年十一月二十七日(日)、『核



講演される森瀧春子氏

と人類は共存できない「被爆者・森瀧市郎の哲学と実践」をテーマに、ご令嬢の森瀧春子・核兵器廃絶をめざすヒロシマの会 共同代表が講演を行いました。

森瀧市郎先生は、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下によってもたらされた人類史上未曾有の人間の悲惨の極みを体験し、「力の文明から愛の文明へ」、「核文明から非核文明へ」と思い至り、一貫して被爆者救護と反核運動に取り組まれた方です。

森瀧春子氏は、父親である森瀧市郎先生のエピソードも交えつつ、その行動と思想、さらには、今、ヒロシマが取り組むべき課題について講演されました。講演会には広島市民だけではなく、福山市、三原市、東広島市などからの人も含め、約二百人の来場がありました。

参加者からは、「核と人類は共存できない」という言葉の意味が理解できた、「森瀧市郎先生の平和に対する情熱を知り、その偉大さを改めて認識した」、「映像を交え、よく整理された話で分かりやすかった」といった感想が数多く寄せられました。

(平和連帯推進課)

国際基督教大学の「広島・長崎講座」現地学習 世界各国からの学生が被爆地で学ぶ

広島市と長崎市では、被爆者の「他の誰にも同じ思いをさせたい」というメッセージに込められた平和への「思い」



松島圭治郎さん(最前列)との記念撮影

を学問的に整理・体系化し、普遍性のある学問として若い世代に伝えるため、世界の大学での「広島・長崎講座」の開設・普及に取り組んでいます。

こうした中、同講座を開設している国際基督教大学の一行が、十一月二十七日(日)から二十九日(火)まで、本財団を訪れました。

参加者は、アメリカに本部のあるロータリー財団により世界各国で選抜

しており、今回が九回目となります。

一日目は、広島平和記念資料館や平和記念公園を見学し、被爆の実相を学びました。

二日目は、松島圭次郎氏の被爆体験証言を聴講し、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で、原爆を題材とした詩の朗読に耳を傾けるとともに、自らも詩を朗読するという体験を通して、被爆者のメッセージへの理解を深めました。

続いて、広島平和研究所研究員との意見交換では、広島への原爆投下に関する議論と現実、核兵器廃絶及び核の民生利用など、戦後広島が直面した問題点等について議論しました。参加者は、それぞれの国の視点から質問し、活発な質疑応答の場となりました。

三日目は、本財団のリーダー理事長から二〇二〇年までの核兵器廃絶に向けた取組について話を聞きました。

二〇一二年二月現在、「広島・長崎講座」は国内四十一大学、国外十六大学の計五十七大学で開設されています。

(平和連帯推進課)



プロフィール
 [あらい しゅんいちろう]
 1931年、山形県で生まれ埼玉県秩父で育ち、父の転勤に従い8歳で広島に移住。中学1年生のとき勤員出勤先の賀茂郡（現在の東広島市）の八本松駅で原爆の炸裂を目撃し、猿猴川にかかる東大橋から入市して母校の焼け跡に行き被爆した。広島大学を卒業してラジオ中国（現在の中国放送）に入社。ドラマやドキュメンタリーなどラジオ・テレビの番組演出を担当した。

被爆体験記

悲劇の中学1年生

peace

本財団被爆体験証言者

新井 俊一郎

建物強制疎開作業に従事

全国の主要都市が米軍の無差別爆撃で壊滅していた昭和二十年春、入学したばかりの中学一年生に学徒動員令が発せられ、全員が広島市内を東西に貫く幅百メートルの防火地帯を造るべく強制的に繁華街の家屋を取り壊す疎開作業に出動しました。

広島高等師範学校附属中学校一年生の私たちも加わりました。大人が鋸で切り倒した建物の廃材搬出が、私たち中学生の役目でした。

農村勤労挺身隊として出動

七月上旬、作業奨励のため各中学校の代表が県庁に召集されました。軍と県の幹部が臨席するなか、一人の先生が発言します。「空襲激化の折から、若い中学生に炎天下の作業を強いるのは危険極まりない。わが校は農村に出動して食糧増産に従事する」。高級将校が怒声を発して威嚇したものの、この発言には誰も反対できなかったとか。

七月二十日、若手の留守組を残して私たち一年生八十人は教官引率のもと賀茂郡原村（当時）に出動し、働き手が居なくなった農家の支援を開始したのである。

生き残ってしまった

かくて私を含む附属中学校の一年生は、残留者十人を失ったものの被

爆を免れ、他校の一年生は殆どが全滅してしまうという悲運に見舞われることになるのです。

全滅した悲劇の中学一年生とは、実は私たちの小学校時代の級友であり、卒業したのち各々の中学校へと進学して行った仲間たちなのです。そして私たちは生き残ってしまったのです。

「順番に帰省を許可する」

お寺と神社に分宿した十三歳の私たちの仕事は、田圃の草取りが主でした。「小さな子供なのに可哀そう」と、農家からオムスビを戴くことがありました。一粒ずつ飯粒を噛み締めながら戴きましたが、白い米粒の味を忘れることは出来ません。

そんなとき教官から「頑張った者から順番に帰省を許す」とのお達しがあり、私は幸運な帰省組の一人に選ばれ、その帰省日が八月六日でありました。

空が光った

広島に帰るべく山陽本線の八本松駅のホームで列車を待っていた八時十五分、突如、ガラスと空が炸裂しました。とっさに身を伏せて顔を上げた私の眼に、ムクムクと虚空に突き上げる巨大な入道雲が見えま

した。 やっと乗り込んだ下り列車は次の瀬野駅で運転中止。下車した私たち

五人は猛煙立ち昇る広島方面へと歩き始めたのです。

生きていて欲しい

爆心地から約三キロメートルの東大橋から広島市に入りました。狭い木橋の上は、全身が焼け爛れ指先から剥け落ちた皮膚を引きずる被爆者で埋め尽くされており、その人々の足元から、幻のように二人の幼女が現れたのです。

小学校二年生くらいの姉が三歳ほどの妹の手を引き、風船のように膨らんだ顔には目と口と思しき小さな窪みがあり、微かな声が聞こえます。「しっかりねっ」と励ます姉の声を残して幼い姉妹は消えて行きました。

生きていて欲しい。見送るしかなかった私の祈りです。

母校は消えていた

あくる七日の午後、私は母校があるはずの千田町に辿り着きました。そこは、赤レンガの文理科大学を残して一面の焼け野原と化していて、救援作業中らしい数人の人影がありました。

その中の母校教官とおぼしき人に私は、「報告書、提出します」と叫んで、出勤先の担任教官から預かって来た文書を差し出しました。後日、母校の焼け跡から級友三人と教官二人の遺体が発見されたと知ります。命令に忠実な中学一年生の私は任務を果し終えたものの、どこをどう通って自宅へ帰ったのか、全く記憶がありません。

遺言・いま語り残さねば！

いまは百メートル道路と呼ばれている建物疎開跡は、全滅した中学一年生およそ六千人のお墓です。その殆どは、生き残った私たちと小学校時代を共に過ごした級友でした。ゆえに往時を想い返したり経緯を語ることを避けた私たちも、はや八十年を迎える老翁となりました。

ようやく重い口を開き始めた生き残り中学一年生の思いを、どうかご理解ください。これは私たちの遺言なのです。



題名：「消えていった幼い姉妹：生きていてほしい」
 制作者：中須賀愛美（基町高等学校普通科創造表現コース2年）、新井俊一郎（被爆体験証言者）

オーストラリアで初のヒロシマ・ナガサキ原爆展を開催

平成二十三年十月十四日から十一月十六日までの約一か月間、オーストラリア北部にあるクイーンズランド州ケアンズ市で、「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催し、五千人以上が来場しました。

ケアンズ市では、二〇一〇年四月の平和市長会議加盟を記念し、これを市民に広報するため、このたびの原爆展開催を企画しました。オーストラリアでは初のヒロシマ・ナガサキ原爆展の開催となりました。



展示会場の様子

言者の葉佐井博巳さん及び職員二名をケアンズ市へ派遣し、原爆展の公式オープニングセレモニーや記念フォーラムへ参加しました。

ケアンズ市のヴァル・シエール市長は、財団関係者の訪問を歓迎して、「世界平和と核兵器のない世界への支援を表明する世界五千都市の市長の一人であることを誇りに思います。ケアンズは、地元の戦争の歴史を、平和を推進する手段として積極的に利用しています」と語りました。

十月二十一日には、原爆展の開会式に続き、開会記念行事として「戦争とは何のためのものか」をテーマとした公開フォーラムが開催されました。オーストラリアの著名なジャーナリストであるジョージ・ネガス氏を進行役とし、ケアンズ市長、リパー理事長をはじめ、葉佐井さんもスピーカーとして参加しました。二百席が準備された会場は満席となり、夜七時半から十時過ぎまでの約二時間半にわたって熱心な議論が行われました。

また、十月二十一日から二十五日まで、原爆展の関連行事として、展示会場や市内の日本語補習授業校、高等学校などで九回の被爆体験証言を行いました。どの会場の聴衆も熱心に葉佐井さんの証言に聞き入っていました。

ヒロシマ・ナガサキ原爆展は、平成七年度（一九九五年）の開始以来、

今回を含めて十四カ国三十八都市で開催しました。平和記念資料館では、今後も海外の人々に被爆の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた取組を続けます。

(平和記念資料館 啓発課)

「被爆体験証言者交流の集い」研修会を開催

本財団が事務局を務める「被爆体験証言者交流の集い」では、被爆体験証言活動を行っている方だけでなく、広く市民の皆様にもヒロシマについて学ぶ機会を提供するため、今年度は放射線について学ぶシリーズ講座の第一目を平成二十三年十二月十日（土）に、第二目を平成二十四年二月四日（土）に開催しました。

第一回講座「放射線ってどんなもの？」
— 仕組みを学ぶ —
講師 加藤一孝・こども文化科学館 学習推進員

加藤一孝さんは、人工的なものだけでなく、本来、自然界にも存在し、日常生活の中で健康に害がない程度に無意識に接している「放射



第1回の講師 加藤一孝さん

線」について、宇宙の成り立ちやその仕組みからひととき、放射線を生み出す原子と原子核の仕組みや放射線の種類などの基礎知識についてわかりやすく説明しました。また、福島原子力発電所の事故発生以来、日々の報道で使用されている専門用語などの解説もあり、放射線について理解を深める上で役立ちました。

第二回講座「原爆 — 放射線の被害、医療の現場から」
講師 肥田舜太郎・元広島陸軍病院 医師

原爆投下直後から被爆者の救護活動に従事した医師、肥田舜太郎さんは、一九四五年八月六日の朝、往診先の戸坂村（現在の東区戸坂）で被爆しました。原爆により負傷した人々たちを救護するため、自転車で急いで広島へ戻る途中、人間だと識別す

ることのできないほど負傷した被爆者に遭遇するなど悲惨な状況を目の当たりにしました。一旦、広島へ戻りましたが、郊外の病院に無数の負傷者が収容されていると聞き、再び戸坂村へ戻り救護活動に従事しました。被爆した人々の症状や、被爆者の看護に当たった人が直接被爆した人と同じ様な症状で亡くなっていたことなど当時の状況を話しました。

最後に福島原子力発電所の事故による放射線被害にも触れ、原子爆弾による被爆の医学的な研究データも多くなき、情報が不足している現状において、今後、健康面対策をとるには、放射線が出る元をなくす以外に方法はないこと、便利になった私達の生活を見直すことも、免疫力を高め、維持する生活を送ることが大切であると話しました。

(平和記念資料館 啓発課)



第2回の講師 肥田舜太郎さん

第二十九回ヒロシマ平和書道展 平和への熱い 思いを書き

平成二十三年十月十六日から十八日まで、平和記念資料館において「第二十九回ヒロシマ平和書道展」を開催しました。(主催―広島平和書道展実行委員会「毎日新聞社、(財)毎日書道会本財団で構成」)

広島県内を中心に北海道から鹿児島まで、四歳から八十九歳まで幅広い年齢の方から、平和の尊厳や生命の尊厳を訴える力作五千百一点が寄せられました。全ての作品に特別賞、特選、秀作、佳作、入選のいずれかの賞が授与されましたが、このうち特別賞百七点の表彰式を十月十六日(日)に行いました。また、この日から展示会も始まりました。特別賞と特選の作品、合計九十四点が展示された会場には、三日間で千九十九人が訪れました。初日には、全国各地から訪れた受賞者やその家族らが作品の前で記念写真を撮りながら喜びを分かち合う姿がたくさ

ん見られました。

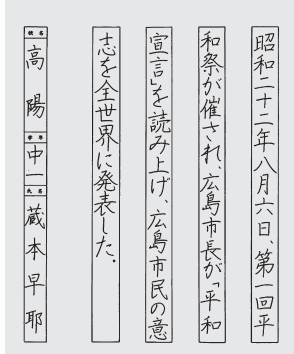
(平和記念資料館 啓発課)

広島平和文化センター理事長賞

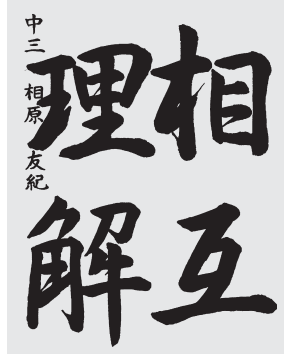
岡山県岡山市政田小学校四年生
岡本惟さんの作品



広島県広島市高陽中学校一年生
蔵本早耶さんの作品



愛媛県松山市久米中学校三年生
相原友紀さんの作品



第二十六回子どもたちの 平和の絵コンクール 多数の力作が 寄せられる

平成二十三年十二月十七日(土)、広島平和記念資料館メモリアルホールにおいて、「子どもたちの平和の絵コンクール」の表彰式を開催しました。

このコンクールは、子どもたちの平和への意識を高めるために昭和六十一年から開催しているもので、今回で二十六回目を迎えました。広島市内の小・中学校百二十校から四千三百五十七点、海外からは八カ国(アメリカ、イラン、インド、オーストラリア、韓国、ドイツ、フランス、ロシア)八百五点、合計で五千百六十二点の応募がありました。

表彰式には、大賞・特選受賞者のうち三十四名が出席し、賞状と記念品の楯を受け取りました。

表彰式終了後は、展示室(5)で大賞受賞者等による作品展開

会のテープカットを行いました。作品展は平成二十四年一月三十一日(火)まで開催し、会場には大賞作品三點、特選作品三十九点、優秀賞作品八十点、合わせて百二十二点の作品を展示しました。小学校の部で大賞を受賞した広島大学附属小学校四年生の木村実優さんは、人々が平和に暮らせるよう願って、

原爆ドームの周りをヒマワリが囲んでいる絵を描き、「東日本大震災で日本が暗くなっているので、明るくなるような絵を描きました」と語ってくれました。中学校の部で大賞を受賞した広島大学附属中学校二年生の平野翠さんは、「戦争という過去があつて、今があるということをおぼれていないかを表現しました」と話してくれました。

なお、大賞・特選受賞者の名前と作品及び優秀賞・入選受賞者の名前は、広島平和記念資料館ホームページ(<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/>)の「キッズ平和ステーション」に掲載しています。

(平和記念資料館 啓発課)

大賞(小学校の部)
広島大学附属小学校4年生
木村実優さん



大賞(中学校の部)
広島大学附属中学校2年生
平野翠さん



大賞(海外の部)
韓国テゲ市 達山小学校2年生
ソミンウさん



平和記念資料館 平成 23 年度第2回企画展

広島、1945 —写真が伝える原爆被害—

■期間：平成 24 年 7 月 9 日 (月) まで

■会場：平和記念資料館東館地下1階展示室(5)

今回の企画展では、これらの中から七十六枚の写真と関連の資料を、九つのコーナーで時系列に沿って紹介しています。

- 被爆前の広島
- 爆心地に立つ
- 死の街
- 傷を負った人々
- 市中へ
- 傷
- 生活をとりもどす努力
- 残る傷あと
- 死者を弔う

被爆前の広島

原爆が投下される前の広島は中国地方の中心都市で、軍都や学都の顔を持っていました。

写真や絵はがき、市民が描いた絵には、活気あふれる広島の様子が残されています。一方で、日々の暮ら



爆心地・島病院の跡に置かれた、関係者の消息を尋ねる伝言版
1945年(昭和20年)10月
撮影/林重男



被爆翌日の本通り
1945年(昭和20年)8月7日
撮影/岸田 貢直 提供/岸田 哲平

しの中にも戦争は入り込んできました。

被爆後の広島

爆心地に立つと、見渡す限りのがれきと、わずかに残った建物だけ。広島は死の街と化しました。焼けこげた遺体や、臨時の救護所に収容された負傷者たちの様子も写真に記録されています。

広島に投下された原爆から発せられた熱線・爆風・放射線や、被爆直後の大火災などにより多くの人が傷つけられ、一九四五年(昭和二十年)末までに約十四万人の人が亡くなりました。外傷ややけど、下痢、腹痛などの急性障害は、被爆直後だけでなく、後々まで人々を苦しめました。



立ち飲みビール屋に並ぶ人たち
1945年(昭和20年)10月11~20日
撮影/菊池 俊吉 提供/菊池 穂子

生き延びた人々

かろうじて死をまぬがれた人たちは、生きるために焼け跡にバラックを建て、必死に生活をとりもどそうとしていました。秋には、一杯のビールを求めて並び、映画の上映会に集まる人々の姿もありました。

復興に向かう営みのかたわらで、原爆の傷が癒えることはありませんでした。病院では治療が続けられ、臨時の火葬場となった学校の校庭には、遺骨が散乱していました。原爆によって家族や友人を失った人もたくさんいました。身近な人々の死を悼み、供養塔を建てて弔いました。

傷

原爆による傷そのものに焦点を当てた写真もあります。その多くは米軍が撮影したもので、長い間米国で

保管されてきましたが、一九七三年(昭和四十八年)に日本に返還されました。

ヒロシマの原点を見つめる

数々の写真は、死と生が交錯した一九四五年(昭和二十年)の広島を切り取っています。ヒロシマの原点を見つめ、平和について思いをめぐらせてみませんか。

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課
☎(082) 241-4004



「爆心地に立つ」のコーナーは、米軍が爆心地に立って撮影した被爆後の広島市街の写真を展示しています。

平成24年 追悼平和祈念館企画展

しまつてはいけない記憶
—家族への思い—

■期間 平成24年1月2日～12月28日
■場所 追悼平和祈念館 地下1階 情報展示コーナー
■入場 無料

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆の実相を伝えるため、毎年テーマを定めて企画展を開催し、被爆体験記や追悼記などを展示しています。

今回は「家族への思い」と題し、被爆の惨状と亡くなった家族への思い、平和への願いを体験記を通じて紹介しています。

昭和二十年八月六日、一発の原子爆弾により広島市の街は一瞬にして破壊され、多くの尊い生命が無差別に奪われました。そして、生き残った人々もまた、家族とのつらい別れを体験したのです。

今回、展示している被爆体験記の中から、西岡克巳さんと岡田恵美子さんの体験記（抜粋）をご紹介します。

西岡さんは当時十五歳、家族を捜すため広島市に入り、入市被爆しました。

……七日の午前中、やっとの思いで、川と道路を目当てにして、自宅であつたろうと思われる所で只、忙然と時の流れを忘れて、佇んでいた。どれ位、時間が立っただろうか。同じ三菱重工の杜宅の人と逢い、家族全員死亡した事を知らされた。只、母は重傷を負い、担架に乗せられ、運ばれた事を知った。その杜宅の人がどこからともなく、大き

な壺を持って来て下さった。真綿を踏むやうなフワフワの瓦を起し乍ら、燻ぶる匂も気にならず、載いた壺に妹達の遺骨を採集していた。形ある骨、崩れ落ちるはかない骨を拾い乍ら幼き妹達の顔が浮んだ。良子、文子、和子と妹達の名前を呼び乍ら、いつしか、とめどもなく、流れ落ちる涙をどうしようもなかった。そして、壺一杯になった遺骨を懐き乍ら長い事入り込んでいた。……

岡田さんは当時八歳、尾長町の自宅にて被爆しました。

……真青な空に三機の飛行機、キラキラと見え弟はバンザイバンザイと手をふっておりました。その時「ピカー」と光り地面に横倒しになりました。次に目に入ったのは、自宅のカベが落ち

柱が「く」の字にまがり、中から母が頭から血を流しながら出て来るのが見え、私の家に焼夷弾が投下されたと思いました。弟は腕や足がみるみるやけどでひびくれ、泣きさげんでいました。頭髮は逆立ち衣服ははがれ、性別が解らない程火ぶくれてる人達と山のふもとに避難しまし



「市民が描いた原爆の絵」河野寛治さん作



「市民が描いた原爆の絵」吉村吉助さん作

た。私は嘔吐がはげしく苦しかった事は忘れてません。その夜

ゴート市内が大火で空が真赤になりこわかった。その後、夕やけを見ると、その時の事を思い出し、何も考えられなく家の中に入ります。私の心の中に悲しい、暗い、重たい形のない物が今だに残っています。……

体験記の続きは、館内の企画展会場もしくは体験記閲覧室で読むことができます。また、当館のホームページ（<http://www.hiro-tsutokinenkankan.go.jp/notice/info.php?id=134&from=top>）にも体験記を掲載しています。

会場では、三十二編の体験記とともに、被爆直後に撮影され

た写真や被爆者が描いた絵、焼けた衣服などの被爆資料も展示しています。また、体験記を、関連する写真や絵を用いた映像と音声で紹介し、被爆の悲惨さや平和の大切さを訴えています。この映像については、過去の企画展で制作したものも含め、体験記閲覧室で観ることもできます。なお、映像はDVDでの貸出も行っておりますので、ご希望の方は当館までお問い合わせください。

体験記を通じて、被爆者の「こころ」と「ことば」にふれてください。

【お問い合わせ】
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
☎082・543・6271



企画展ポスター

被爆体験記六編を 十六言語に翻訳、 公開しています

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、海外から来館する多くの人々に被爆の実相を伝えるため、母国語で読むことのできる被爆体験記を翻訳、公開しています。被爆体験記執筆補助事業で作成した被爆体験記の中から六編を選び、十六言語の翻訳版を作成し、体験記閲覧室の外国語コーナーに配架するとともに、英語、中国語、韓国・朝鮮語の三言語は収蔵資料検索装置でも公開しています。



多言語化された被爆体験記

置でも公開しています。

この事業は平成二十一年度から被爆体験記六編の十言語への翻訳から始まり、平成二十三年度は新たに六言語への翻訳を行いました。現在、英語、中国語、韓国・朝鮮語、アラビア語、イタリア語、インドネシア語、ウルドゥー語、スペイン語、タイ語、ドイツ語、ヒンディー語、フィリピン語、フランス語、ポルトガル語、マレー語、ロシア語の十六言語で閲覧することができます。

六編の中には、原爆で二人の娘を奪われた母の悲痛な思い、九死に一生を得た動員学徒が市内で見た地獄のような光景、被爆で大けがを負い、現在に至るまで数々の後遺症に悩まされている男性、大けがを負いながらも我が子の安否を気遣い亡くなっていった母、義父母や夫をあとでいつい原爆で亡くし、自殺を考えたという女性、上官の計らいで直爆を免れたが、被爆により瀕死の状態になった上官を助けることができなかつた兵士などのつらい思いや平和への願いが綴られています。

この翻訳版は当館のホームページ

ページ (<http://www.hiro-tsuio.kinokan.go.jp/>)でも閲覧することができますので、多くの方々にご覧いただきたいと思えます。

なお、当館では被爆体験記のほかにも、被爆証言映像の閲覧や被爆関連図書を読むことができます。ぜひ、ご来館いただき、被爆者の「こころ」と「ことば」に触れてください。

(原爆死没者追悼平和祈念館)

追悼平和祈念館の入館者が二百万人に到達しました

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の入館者数が、平成二十三年十一月四日(金)、二百万人に到達しました。

二百万人目の入館者になったのは、観光で広島市を訪れたドイツ人女性イングリッド・ズッケさん(56)です。岩川和行館長(いわがわかずゆき)から、記念品として原爆被害を伝える図録や原爆ドーム型カード立て、花束を贈呈しました。



二百万人目の入館者となったイングリッド・ズッケさん(左から三人目)

ズッケさんは、「原爆の被害を受けた街がどう変わったか見たい」と思い、広島に来ました。今日は平和記念公園を散策し、原爆ドームを見た後に追悼平和祈念館を訪れました。追悼平和祈念館は静かな祈りの場所でした」と感想を述べられました。

岩川館長は、「これからもできるだけ多くの方々に、追悼平和祈念館や平和記念資料館にご来館いただきたい。そして、両館での体験を自分の中だけにとどめておくのではなく、家族や友人など身近な人に伝えていただきたい」とコメントを発表しました。

追悼平和祈念館の入館者数

は、平成十四年八月一日の開館以来、九年三ヶ月で二百万人に達したことになります。平成二十二年の入館者数は約二十一万五千人と、年度別では過去最高を記録しました。

追悼平和祈念館では、原爆死没者を静かに追悼し、平和について考える場所として「平和祈念・死没者追悼空間」を設けるとともに、原爆死没者のお名前と遺影(写真)の登録、被爆体験記や被爆証言映像などの収集公開を行っています。また、戦争や原爆の恐ろしさ、平和の大切さを語り継ぐことを目的とした被爆体験記朗読会を開催しており、平和学習で広島を訪れる児童・生徒を初め、多くの方々に来館していただいています。

海外からの来館者も多く、被爆体験記の一部は母国語で読むことができるように、英語や中国語、韓国・朝鮮語など十六言語に翻訳しています。また、英語による被爆体験記朗読会の開催や、被爆体験記・被爆証言映像のホームページ掲載なども行っており、これからも広く内外に情報発信してゆきます。

(原爆死没者追悼平和祈念館)

一緒に世界へ踏みだそう！

平成二十三年度

「国際交流・協力の日」

平成二十三年十一月二十日(日)、

☆「地球のステージ6」〜久遠の帰還・震災特別編〜

広島国際会議場、平和大通り緑地帯などを会場に、「国際交流・協力の日」として三十二の催しを開催しました。

十二回目となるこのイベントには延べ七千二百人が参加し、国際交流・協力について学びました。

今年も国際医療救済活動を展開されている桑山紀彦さん(宮城県名取市で病院を開業している精神科医)が案内役となり、ライブ演奏と大型映像を使って、世界中で起きている様々な出来事を紹介しました。



ひろしま国際村～世界の屋台

ステージは三部構成で、最初のルワンダ篇では、ルワンダ紛争の中で希望を失っていた高校生が桑山さんとの音楽を通じた交流により心を開き、未来への想いをはせ始める様子を通して、戦争被害の悲惨さと平和の尊さを訴えます。

続いて、タイ・カンボジア国境の難民キャンプでの活動の様子と、そのキャンプからインドシナ難民として来日している青年との交流を紹介し、在住外国人とへ共に生きるための大切さを訴えます。

最後に、桑山さんの病院は宮城県名取市という東日本大震災の被災地の真ったた中であり、病院は幸いに津波の被害を免れたため直後から患者さんが集中したご自身の経験と、被災した皆さんの懸命に生きる姿を、「東日本大震災編」として紹介しました。参加者は桑山さんの献身的な活動に深い感銘を受けていました。

☆「ヒロシマからなんとかなきゃ!」〜東日本大震災と国際協力〜
JICA(独立行政法人国際協力機構)などが全国で国際協力活動の重要性をPRするプロジェクトを開催しました。地球のステージの桑山さんに、広島からこのプロジェクトのメンバーで歌手の玉城ちはるさん、NPO法人代表の渡部朋子さん、青年海外協力隊OBの細川光宣さん、国際協力リーダーの石原遼さんの四人を加え、五人がそれぞれの行っている国際協力活動と東日本大震災の被災地での支援活動について紹介し、広島からできる国際協力活動と被災地支援について考えました。

☆子どもたちが平和を願って演じた「PRAY(アイフレイ)」
原爆を題材に、広島の子どもたちが戦争のない未来を願って演じるミュージカル「PRAY」を公演しました。

☆世界の料理と民芸品バザー
国際会議場南側の平和大通り緑地帯では、ひろしま国際村と題して世界のような屋台料理を販売しました。また、国際色豊かな民芸品バザー会場も多くの来場者で賑わっていました。売上は各団体の国際協力活動に役立てられます。

☆活動の紹介
市民団体、大学や企業・団体等がブースを設け、それぞれが取り組む国際交流・協力活動の内容を紹介しました。会場には、NPO設立やNGO活動についての相談コーナーを併設しました。

☆日本伝統文化の紹介
着物の着付けや茶道、いけばな、

☆親子で楽しむ
イベント会場をまわってクイズに答えるとプレゼントがもらえるクイズラリーや、世界のあそびの体験など、親子で楽しめる催しを開催しました。

このほかにも、英語によるディベートの体験や、広島と世界の若者による意見交換、鍵盤ハーモニカや世界のコインを寄贈することで世界の子どもたちを支援する催しなど、多種多様な催しを開催しました。(国際交流・協力課)



親子で体験 世界のあそび

「姉妹友好都市の日」記念イベント 市民が海外 文化を堪能

広島市は海外の姉妹・友好都市提携六都市に対し、市民の方々に一層親しみと理解を深めていただくため、平成十三年に都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を設けて、記念イベントを開催しています。平成十五年からは、この事業を本財団が市から受託して実施しています。各イベントの進行役はヒロシマ・メッセンジャーが務めました。

重慶の日

昨年十月二十三日（日）、広島市留学生会館で記念イベントを開催しました。主催―平成二十三年度重慶の日実行委員会。

まず、来場者は、重慶市特産品の火鍋スープを使用した麻辣燙、焼餃子、麻花の試食に舌鼓を打ちました。その後、重慶市からの国際交流員が、重慶市の概要や似ているようで異なる日中の漢字について、パワーポイントによる映像で分かりやすく紹介しました。

記念コンサートでは、日本中国友好協会広島支部の皆さんによる太極拳と太極剣の表演、来場者全員

で太極拳の体験、広島市在住で世界的二胡奏者の趙栄春さんによるコンサートを行い、最後には趙さんの伴奏により全員で日本語と中国語の「赤とんぼ」を合唱しました。



趙栄春さんによる二胡の演奏

三百人の来場者は、楽しみながら重慶市や中国への理解を深めました。

ホノルルの日

昨年十一月三日（木・祝）、広島駅南口地下イベント広場において、「ホノルルの日」記念イベント「ホノルル・フラパーティー」を開催しました。主催―平成二十三年度ホノルルの日実行委員会。

古典的なフラ「カヒコ」によるオープニングの後、駐大阪・神戸アメリカ総領事館総領事をお迎えしてセレモニーを行いました。

続いて、ヒロシマ・メッセンジャーと、ホノルル出身のダリル・サトウさん、アメリカ出身のケリー・ジャクソンさんの四人が、大型映像装置を使い、ホノルル市の食文化、

歴史、観光地などを紹介しました。メイン・イベントは、三組のハワイアンバンドとフラのチームによる本格的なステージです。かわいい子供たちのフラや、優雅で華麗な女性のフラで、会場は南国ハワイのムードに染まり、華やかな雰囲気になりました。

また、来場者参加イベントとして、ハワイアングッズの当たるクイズや、出演者と来場者がステージ上で一緒にフラを踊るレッスンも行われ、最後は「愛するハワイ」を参加者全員で合唱してイベントを終了しました。

会場内では、ハワイアングッズの展示販売やリボンレイ製作体験もあり、約五百三十人の市民が、アメリカやホノルル市について理解を深めていました。

（国際交流・協力課）



演者のレッスンによりフラを踊る来場者

日本語教室ボランティア スタッフのための スキルアップ講座の開催

広島市内では、約二十の外国人市民のための日本語教室が、日本語ボランティアグループにより運営されています。それらの日本語教室を支援する目的で、ボランティアスタッフのスキルアップのための研修会を全三回開催しました。

一月十日（火）、第一回研修会の前半では、NPO法人ヒザサポートセンター 広島理事長の益田浩司さんに、今年七月九日（月）からスタートし、大きく制度が変わって全ての外国人市民に関係のある新しい在留管理制度について、ご講演いただきました。後半では、財団法人ひろしま国際センター日本語常勤講師の犬飼康弘さんに、各教室が抱える課題を解決するためには、実際に活動を振り返ることが重要である、というお話をいただき、各教室の指導状況と問題点を共有するためのグループディスカッションを行いました。

続いて一月十五日（日）、第二回研修会（財団法人ひろしま国際センターと共催）では、横浜国立大学留学生センター非常勤講師の矢部ま

ゆみさんに、毎日の活動を振り返った時、学習者にどのように役立っているのか、また何が不足しているのかを、米国の成人に対する識字教育の指標であるEFF（Equipped For the Future）スタンダードの考え方に沿ってお話しいただきました。

二月十四日（火）、第三回研修会では、まとめとして、犬飼康弘さんに、参加者の事例をもとに、EFFスタンダードの考え方に照らして、学習者の役に立つ学習支援について分かりやすく説明していただきました。

参加者からは、「学習者の目的を表面的にしかとらえていなかったが、学習者の立場を理解し、個々にあった指導方法を見つけていることが重要だと感じた。」などの感想が寄せられました。

（国際交流・協力課）



研修会でのグループディスカッションの様子

留学生会館まつり二〇一一年 一人一人の「ふれあい」を大切に!

留学生をはじめ在広の外国人と市民の皆さんとの交流を深めるとともに、留学生に社会参加の機会を提供すること等を目的として、平成二十三年十一月六日(日)、広島市留学生会館において、会館の一大イベントである「留学生会館まつり二〇一一年」を開催しました。

今年も昨年に引き続き、荒神地域の胡祭り、広島南授産所感謝祭と同時開催ということもあり、様々な国際色豊かなイベントは昨年より多い約二千七百人の参加者でにぎわい、参加した方々にとっては楽しい一日となりました。主催「留学生会館まつり二〇一一年実行委員会、(公財)広島平和文化センター国際部留学生会館、広島市留学生会館「留和会」、共催「荒神地区社会福祉協議会、広島地域留学生団体育成支援協議会」。

二〇一一年三月十一日に起こった東日本大震災の後、世界の友人から様々な支援が寄せられ、留学生たちは改めて「一人一人のふれあい」の大切さを目の当たりにしました。これを受け、十一回目と



参加した留学生たち

なる今回のまつりは、市民の皆さんと留学生がさらなる交流を深めるため、テーマを「ふれあい」としました。

また、留学生の意向を反映させるために、入居留学生で組織する「留和会」とイベントの項目、参加方法、広報、実施準備作業等についての企画会議を行い、祭りの準備を行いました。その結果、去年より各イベントの配分時間にめり

はりがつき、充実した内容になりました。さらに本年は、広島市立大学国際部の日本人学生十名にボランティアをしていただきました。

午前十時、二階ホールでオープニングセレモニーが行われました。追田清三留学生会館長による挨拶の後、市民によるファンファールのブッチーナによる演奏があり、留学生会館まつり二〇一一年の華やかな幕開けとなりました。

屋外周囲での恒例の「お国自慢・味自慢世界の各国料理屋台」では、十一カ国から十五団体が出店し、各団体がバラエティに富んだ自慢の料理に腕をふるいました。昨年に引き続き、南側の駐輪場だけでなく、大州通りに面した北側にも屋台テントを設け、市民の方々と沿道の皆さんににぎわいを提供しました。

また、今回は一階交流ラウンジをフードコートとして設けるとともに、市民団体の方に協力していただき「Lunch Time Performance」を開催し、来られた市民の皆さんに食と音楽で楽しんでもらいました。

今年も環境に配慮し、食器をプラスチック容器から紙の容器に統一して、ゴミの排出減量にも努めました。

二階ホールでは午前中、「AN

A留学生日本語スピーチコンテスト」(協賛「全日本空輸株式会社」)を実施しました。今回は「私が出会った日本人の」をテーマに、予選を通過した十名の広島県内在住の留学生がスピーチを行いました。聞きに来られた市民の方々は「留学生の持つ日本人に対する視点に驚いた」、「熱心にスピーチする姿に心を打たれた」という感想を頂きました。

午後の前半は、二階研修室で「my homeland」留学生とのおしゃべりコーナー」と題して、留学生による母国紹介を行いました。市民の方にとっては、留学生や広島市の国際交流員と直接、興味があがる国について話ができるということ、十七カ国・一地域のいずれのコーナーにもにぎわっていました。

午後の後半では、七カ国七グループの留学生によるミニイベントを行いました。中国人留学生が市民団体の方と一緒に日本舞踊を披露し、また、トルコの楽器演奏を行いました。エリザベト音楽大学大学院留学生による楽器の演奏も行われました。そして今回は、留学生と日頃から交流している安田女子大学のみなさんにKEEP OPダンスを披露していただきました。



チャリティーバザー

他にも、一階交流ラウンジでは、東日本大地震チャリティーバザーとして、留学生が作った「ふれあいも」(サツマイモ)を販売しました。売り上げの三万六百五十二円は、全額日本赤十字社を通じて東北復興のために被災地に送金しました。また、一階交流ラウンジでは、留学生による美術展や、写真展も行いました。

さらに今回は、広島市立大学の方や熱帯雨林保護団体ひろしま(RFJ HIROSHIMA)の皆さんに協力していただき、似顔絵や筒描き・ボディペインティングコーナーを設けました。

最後に、クローキングセレモニーでは、屋台グルメリッキングを発表し、来年皆さんと再会することを約束して閉会しました。

(広島市留学生会館)



プロフィール
 [こばやかわ けん]
 1951年生まれ。
 2003～2007年、広島平和教育研究所事務局長
 2008～2011年、広島平和教育研究所理事長、広島平和文化センター理事、広島県教職員組合執行委員長

“平和について思う”

被爆体験の継承と 人権教育の推進

広島平和教育研究所
小早川 健

広島平和教育研究所

広島平和教育研究所は一九七二年に設立されました。広島平和教育研究所設立宣言文には「人間の心に平和のとりでを築くことは、教育の力にまつところが大きく、ヒロシマは核時代の教育を問い直す原点である。教育を通して、ヒロシマを後の世代に継承し、人類共通のものにすることは、世界平和に貢献する人類の責務である」と述べられています。

その「責務」を自覚しつつ、私たちは「平和教育」に関する研究を進めてきました。

平和教育研究所設立宣言文は、ユネスコ憲章の前文「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」を引用しています。

ユネスコ憲章は第二次世界大戦を「人間の尊厳・平等・相互の尊重」という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによつて可能にされた戦争であった。」と分析しました。

ヒロシマの教職員として、被爆体験の継承は大変重要なテーマです。そのことを抜きにヒロシマでの

平和教育を語ることはできません。しかし、ユネスコ憲章にもあるように、「人間の尊厳・平等・相互の尊重」という民主主義の原理（いわゆる人権問題）の推進なくして平和な世界を作り出すことはできないのです。

平和教育研究所は被爆体験の継承とともに「性差別、障害者差別、部落差別、民族差別」等、広い分野での人権問題も平和教育の課題としてきました。

平和教育実態アンケート

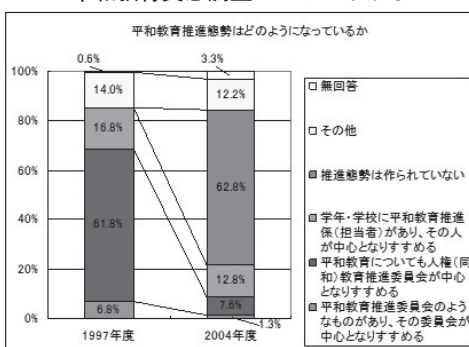
広島平和教育研究所は昨年、「平和アンケート」調査を実施しました。まだ分析が終わっていませんが、分析が終わりしだい報告をおこなう予定です。

少し古くなりますが、一九八二年、一九九七年、二〇〇四年には「平和教育実態調査」を実施しています。（広島平和教育研究所のホームページ <http://www1.onn.ne.jp/tipe/>）で研究報告をクリックすれば二〇〇四年度の実態調査を見ることが出来ます。）

二〇〇四年の実態調査を一九九七年の実態調査と比較すると、学校の中に平和教育に関する年間計画を立てて実践している学

校が激減するなど大きな変化があります。また、平和集会などの取り組みが、広島市内の学校に比べ、広島市以外の学校で大きく減少しています。この傾向は、現在も変わっていません。

平和教育実態調査アンケートから



※一九九七年調査では、平和教育推進体制は何らかの形で存在しているだろうと考えられたため「推進態勢は作られていない」という選択肢はなかった。

なぜ、このような傾向が起きているのか。それは文部科学省「是正指導」(二〇〇四年度の平和教育実態調査の中には是正指導の説明を行っています)の影響が大きいのです

が、それに加え、学校現場の多忙化が拍車をかけています。学校では膨大な量の報告書類作成、学校評価制度・人事評価制度等による達成目標数値向上のための取り組みに多くの時間と労力が費やされ

ているのが現状です。また、「平和教育」は学習指導要領の二項目として掲げられているわけではありませんが、ありませんから、テストの点数を重視する風潮とも相まって、授業内容の中に平和教育が取り込みにくくなっているのです。その結果、人権学習も平和学習もその規模をどんどん縮小しています。

しかし、教育基本法は「教育の目的」を次のように規定しています。「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」すなわち、教育の目的は「人格の完成」であり、学校教育は「平和で民主的な国家及び社会の形成者」を育てることに重点が置かれなければならないのです。

一九四六年、文部省(当時)は「新教育指針」を作成し、教育関係者に次のように呼びかけました。「新しい日本を平和的文化国家として建設しよう。そして平和を愛し文化を求め人間をつくらうこと。」と。私たちは、もう一度教育の基本に立ち返り、平和教育に取り組んでいきます。

(平成二十四年二月寄稿)

“ヒロシマの心”を発信する人々

戦争も核兵器もない平和な世界をめざして —市民の力で核兵器廃絶を!—

～広島県生活協同組合連合会 平和への取組み～

署名活動に取組みませんか？
教えて下さい。

私たちは三五年前から市民六団体(二つの県原爆被害者団体協議会、県地域女性団体連絡協議会、県宗教者NGO協議会(広島YMCA)、県青年連合会、県生協連)で協力・連携し、市民平和行進等の平和への取組みを行ってきました。平和市長会議提唱の「二〇二〇ビジョン」(核兵器廃絶のための緊急行動)には県生協連としては当初から賛同し、全国の生協へ呼びかけ全面的にバックアップしてきました。署名は前回の再検討会議後も集まり続け、県生協連の二〇一一年度中間集約は十四万四千九十九筆となり、昨年の「市民の集い」で松井一貫広島市長(平和市長会議会長)に提出しました。

平和市長会議が二〇〇七年に開始したCANT(都市を攻撃目標にするな)市民署名活動では、世界中から集まった署名のうち、二〇一〇年のNPT(核不拡散条約)再検討会議までに国連に提出されたものは二〇二万筆を数え、現在はニューヨークの国連本部に常設展示されています。

今回は、市民署名活動の大きな推進力となっている広島県生活協同組合連合会(県生協連)の取組みをご紹介します。専務理事の岡村信秀さんにお話を伺いました。

ようか。

現在の署名活動について教えてください。

私たちは現在、平和市長会議の第二段の市民署名活動「核兵器禁止条約の早期実現を求める市民署名」に取組んでいます。二〇二〇年までに全ての核兵器を廃絶するためには、二〇一五年のNPT再検討会議が重要となるでしょう。それまでに核兵器廃絶を求める市民の声を全国で二百万筆まで積み上げ、国連に提出することを目指しています。

国家間の条約に関することから市民は再検討会議には参加できませんが、次回の会議では、世界で唯一の被爆国である日本政府が、市民の声をしっかりと受け止め、核兵器廃絶へのリーダーシップを取っていただきたいと思っています。

「市民の集い」について教えてください。

「戦争も核兵器もない平和な世界を」市民の集い」は私たちが現在最も力を入れている取組みの一つです。これは、市民の側からアプローチして、平和市長会議加盟自治体同士の連携を強化してもらい、平和行政を盛り上げていこうとするもので、広島では第一回を昨年十月二十八日に開催しました。



県生協連の2011年度CANT署名中間集約を松井広島市長に提出(写真前列右から松井広島市長、富田県生協連会長理事、上田県生協連理事(生協ひろしま理事))

開催されており、多くの自治体首長にご出席いただいています。昨年はその他にも、神奈川県で「ずし平和デー」が開催されました。滋賀県では「草津市平和祈念フォーラム」が開催されました。また奈良県では「ピースアクションinなら」が開催され、秋葉忠利前広島市長の講演も行われました。広島では今年五月に第二回の「市民の集い」を開催します。

各地の「集い」は、市民が主体となって開催され、次はどこで開催、といったスケジュールが組まれているわけではありません。この流れを全国に広げ、市民一人一人が自分の平和への訴えが行政に反映され、最終的には世界に届くのだという見方をもっといただきたいと思っています。いずれにしても、今もっとも大切なことは思想信条の違いを超え、力を寄せ合うことだと思います。

二〇一二年は国連が定めた国際協同組合年です。県生協連では市民六団体との連携を土台に全国の生協との連携を一層強化し、国際協同組合年にふさわしい平和への取組みを進めていきたいと考えています。

今日はどうもありがとうございました。

(平成二十四年二月八日取材)